

入賞
飯沼 英雄(70) (塩尻市)

小さな幸せ ～野菜の宅配便～

夏のある日、一人暮らしの我が家の電話が鳴った。

「もしもし、野菜の宅配便が届いたよ。どうもありがとう。」

受話器の向こうから名乗らなくてもすぐわかる元気な姪の声が聞こえ、私は答えた。

「野菜が届いたんだね。今年は天候が不順だったせいか、りっぱな野菜ができなかったよ。」

が、彼女から返ってきた。

「とうもろこしやとまとおいしかったよ。2、3日前に次女が私に言ったのよ。“そろそろ伯父さんから野菜の宅配便が届く頃じゃないの”だって…。毎年のことだから楽しみに待っているみたいなのよ。」

私はこれにはびっくり。次女といえば、そろそろ小学生になる年頃だ。何年か前に上京した私は姪の家族に会う機会があり、まだ幼いかわい顔の次女の姿が目に見えてきたのだ。

「そうか、子供達が楽しみに野菜を待っていてくれるのなら、これからはがんばって作るよ。」

最後にこう言って私は電話を切ったが、しばらくは風船がふくらむように小さな幸せが心を埋めていくのだった。

私は、10年ほど前から我が家の畑で野菜作りを始め、夏はじゃがいも、とうもろこし、とまとなどを作った。そして秋にはだいこんやにんじんを収穫できたのだが、店で売っているようなりっぱなものができない。もしかしたら私は完璧主義なのか、ガッカリして野菜作りを何度やめようと思ったことか。さらに野菜作りは意外とむずか

しいものだと、その奥深さをどんなに痛感したことかしれない。

ところが一人暮らしなので野菜を食べ切れずに、子供がいない私は東京に住む姪の家族に宅配便で送るのだ。姪が結婚した頃はお礼の電話は彼女一人の声だけだったが、子供が生まれると受話器の向こうからかわいい声が聞けるようになったのだ。

私といえば、結婚したがとても欲しかった子供ができる前に離婚。ところが我が子同様にかわいがっていた姪に生まれた子供がいつの頃か孫のように思え、受話器から聞こえるその声に一生懸命耳をかたむけ、癒されてきたこの数年なのだった。

その子供達から私の送る野菜を楽しみに待っていてくれることを今回知り、そのためには野菜作りをやめるわけにはいかなかったのだ。姪の家族に喜ばれる野菜を、たとえりっぱでなくとも、今後もずうっと作り続けていきたいと改めて心に誓う私なのだ。

審査員講評

一人暮らしで子供のいない作者が、野菜を作って姪の家族に送る「ささやかな幸せ」の心の内を綴った好エッセイ。“風船がふくらむように…”の表現もいい。